

I

出題の意図

- ・文章の内容を正確に理解し，適切に要約し，記述する能力を問う。
- ・文書の内容を踏まえ，解決策や事例などを考察し，自らの考えを論理的に記述する能力を問う。
- ・文章の内容と図表などを照合する能力を問う。

解答例

問 1

図：(ア)

理由：195 万年前のホモ・エレクトゥスの狩猟現場遺跡が発見されており，また，ホモ・サピエンスが誕生した時代には，ホモ・エレクトゥスもネアンデルタールもいたと記述があるため。

(81 字)

問 2

毛皮に覆われておらず，いわば裸で，繊細で華奢な身体構造

(27 字)

問 3

重い構造の骨と筋肉を活かして，大型の生き物を狩猟したホモ・エレクトゥスと比べ，ホモ・サピエンスは華奢な体を活かして，貝類や魚類などの水棲生物，水草などの水中・水辺の植物を食糧とすることを見出した。

(97 字)

問 4

ホモ・サピエンスの漁法の発達の具体例として，9 万年前に発見された角の芯の骨でつくられた逆刺のある銚が挙げられる。逆刺のある銚は，一度獲物に突き刺したあとに抜けにくくなると考えられる。そのため，その技術を持っていなかったその他のヒト属より食料の確保をより効率的に行うことができるため，ニッチの獲得・拡大に貢献したと考えられる。また，漁法の発達にともない，より鋭利な刃物のようなものを用いるようになったと考える。それら鋭利な刃物は，漁に用いられただけでなく，例えば毛皮の加工などにも使用できるため，寒冷地で必要な衣服を作成する際にも大いに役立ったと考えられる。道具の発達とそれに付随した環境への適応性の発達が，ホモ・サピエンスのニッチの獲得・拡大に貢献したと考える。

(331 字)

Ⅱ

出題の意図

- ・ 図表から情報を読み取り，その特徴を定量的に記述する能力を問う。
- ・ 図表から課題を抽出し，課題の解決策について自らの考えを論理的に記述する能力を問う。

解答例

問 1

食用魚介類の消費量は 2001 年度までは約 38kg 前後で推移していたが，それ以降は減少傾向であった。2010 年度までは，肉類の消費量より多かったが，それ以降，魚介類の方が少なくなり，2023 年度には約 21kg にまで減少した。一方，肉類消費量は一貫して増加傾向にあり，2023 年度に約 34kg に達した。 (149 字)

問 2

①2003 年に魚介類の摂取量が肉類より多かったのは 40-49 歳である。2003 年から 2023 年にかけて，魚介類の摂取量は約 93g から約 46g に減少し，肉類は約 86g から約 133g に増加した。 (93 字)

②2003 年の年齢階層：30-39 歳

20 年間の変化の割合は 2003 年と 2023 年の 2 点を結ぶ線分の傾きの絶対値である。そこで，図 2 で各年齢階層の線分の傾きを比較し，その絶対値が最も大きい約 1.3 であった 2003 年の 30-39 歳を選んだ。 (100 字)

問 3

図 1 より，2010 年度以前は肉類より魚介類の消費量の方が多かった。つまり，2001 年度以降に魚介類の消費量が減少した要因を解消できれば，消費の増加が期待できる。表 1 で，魚介類を購入する理由と購入しない理由に「家族が求めるから」が挙げられている。このことから，家族，特に核家族化が進んでいる近年においては，子供の要望が消費動向に影響を及ぼしている可能性がある。図 2 より，2023 年では，子供にあたる年齢階層の 7-14 歳と 15-19 歳の魚介類の摂取量はその上の年齢階層に比べ少ない。さらに，親にあたる年齢階層の 30-39 歳や 40-49 歳も魚介類より肉類の摂取量の方が多い。したがって，子供が好む魚介類の種類や消費形態を調査し，それに基づいた商品開発，さらに宣伝や販売促進などの活動を積極的に行う。これらにより，子供の年齢階層と実際に魚介類を購入・調理する親の年齢階層の魚介類の摂取量の増加が望める。 (397 字)